

近代資本主義論の生成 (二)

—ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について—

田 村 信 一

g 初期資本主義論

以上のように資本主義的精神と資本の発生を説明した後、ゾンバルトは第1巻の後半を第4部「工業的資本主義の端緒とその展開の障害」、第5部「初期資本主義時代末期における工業と資本主義」、第6部「現代における工業的資本主義の凱旋行進」、第7部「現代における手工業と手工業者」というタイトルで叙述を展開している。この著作をここまで読み進めてきた読者は、第4部以降の諸章に発生史的意味での経済史的叙述を期待するに違いない。すなわち地代蓄積によって本源的資本を獲得した資本家が最初は貨幣・商品を取り扱う業務からどのように工業(産業)資本家へと転化したのか、初期資本主義の資本蓄積はどのような経営形態で行われたのか、初期資本主義から高度資本主義への移行はどのように行われたのか、こうした論点が実証に基づいて論証されていると考えるであろう。しかしながら読者の予想はほぼ完全に裏切られる。ゾンバルト自身も当然このことを意識して、第4部の冒頭で次のように述べている。

「今や必要な人的・物的財産を所有する経済主体が現れ、経済生活を自らの新しい形態に整えていく。その計画の実現のために欠けているものは、彼らの活動の客観的条件が満たされることである。そこで多くの読者は、この条件の実現についてここで論じられると期待するであろう。しかしながらこの期待に応えることはできない。というのも材料のそのような整序は本書の基本思想に反するからである。本書の基本思想によれば、歴史的事実の経験的・偶然的形態における叙述と、そうした事実が一度与えられた…という前提の下での経済的法則的経過の証明とが鋭く区別される。我々は資本主義的経済主体ないし経済原理の発生を偶然性の観点の下で考察するが、それに対して世界が経済主体の像に従って

いかに創出されるかを法則性の観点の下で考察する。後者の考察様式を我々は理論と呼ぶ。したがって資本主義的経済様式の客観的条件の成立論は、この叙述の発生史的部分ではなく、当然理論的部分に属する。しかし [本書の] 第2巻の内容をなす部分は分割され、第2巻は初期資本主義的国民経済の高度資本主義的国民経済への法則的編成替えの証明に限定される。したがってその発展に先立って、初期資本主義的経済組織を編成替え過程の出発点であるその最高に完成した状態において分析することが行われなければならない。これが次の [第5部] の課題である。だが我々が初期資本主義的経済時代の全体の経過とその独自の発展条件を黙して完全に無視してしまえば、ひどい欠陥であろう。そういう訳でこの [第16] 章では、資本主義の主体的前提が実現されたその後を生じたことに関して方向づけの概観が与えられるべきである。」(S.398-9.)

以上の論述から明らかなように、「経験的・偶然性の観点」から行われる資本主義の発生史的考察はすでに終了し、第2巻で「法則性の観点」から遂行される「資本主義発展」の理論的考察のいわば準備的考察が行われるというのである。そしてそれは初期資本主義時代全体の「概観」と初期資本主義的経済組織の「最高に完成した状態」の分析からなる。

ところでゾンバルトは初期資本主義の終了を、イギリスでは18世紀半ば、フランスでは7月王政成立後、ドイツでは19世紀半ばとしており (S.422.)、第5部の初期資本主義的経済組織の「最高に完成した状態」の分析は、19世紀前半(初期資本主義末期)のドイツに限定されている。初期資本主義時代全体の「概観」はわずか10ページ(その後にくく「展開の障害」もおおよそ10ページ)であるから、読者は14世紀のイタリアから19世紀のドイツへと一挙に連れ去られる印象を持つのである。

では初期資本主義時代全体の「概観」がどのように与えられているのだろうか。ゾンバルトはまず、14世紀の商人が多数の雇用者を擁しつつ広範な支店網を形成したこと、商人の「人格的・技術的労働」がますます後退して「財産処理」が主たる活動内容となったことを指摘して、「14世紀以降のイタリア諸都市において、また15世紀以降の南ドイツの諸都市において商業が著しく資本主義的刻印をおびていたことはいささかの疑問の余地もない」(S.399.)、と述べている。その場合彼が依拠

したのは、シュモラー学派の多数の経済史家とカニンガムやアシュリーらの研究であった。ゾンバルトはこれらの研究を総括して次のように述べている。

「規則として定立されるのは、最初に高度な蓄積を達成して生産部門に移行するのは商業ないし銀行資本であり、端緒において手工業的生産者が資本主義的企業者に転化する例はほとんどない、ということである。しかも資本が貸付資本としての役割を果たし始め、次第に生産資本としての地位に進出するということが、工業資本主義の一種の発展法則であるように思われる。我々は、このような資本家と技術的労働者の緩やかな結合を資本への間接的従属と名づけた。」（S.401.）

この論述は具体的にいえば、いわゆる問屋制前貸しの展開によって独立の手工業経営が家内工業者として商業・貸付資本に従属していくプロセスを指しており、マニファクチュアや工場制における賃金労働者の雇用を「資本への直接的従属」と呼べば、ゾンバルトが前者の展開を初期資本主義の発展コースと見なし、「資本への間接的従属」から「資本への直接的従属」への展開を「工業資本主義の一種の発展法則」と理解していることが分かる。

他方ゾンバルトは同時に、こうした発展と「並んで」初期資本主義時代の初めから、鉱山・繊維・製紙などの分野で「マニファクチュアあるいは工場さえも」営まれ、大経営における技術進歩や「資本集中」すらみられることを指摘している。（S.404ff.）後にいわゆる「早期産業革命」と呼ばれる事実である。しかしながら彼は、こうした事例を重要ではない例外的現象と考えていた。初期資本主義時代の特徴は、「決して些細ではない財産の蓄積にもかかわらず、資本主義の進歩が…極めて小さかった」ことにある。前述した経済主体が「経済生活を自らの新しい形態に整えていく」という意味での「資本主義の自然的発展」は様々な事情によって「抑制」されたのである。（S.409.）

その理由は簡単にいえば、蓄積された財産の「非生産的目的」、とりわけ戦争への利用であり、また飢饉・疫病・戦争による人口増加の、すなわちプロレタリアートの生成の「妨害」であった。（S.410.）そこには絶対主義時代における常備軍の整備・君侯の公債政策だけでなく、近代国家の重商主義的商業覇権政策も含まれており、これらすべてが蓄積

された資本を絶えず「非生産的目的」へと流失せしめ、戦争目的のための兵制の整備と植民経済の拡大は生産的労働力を常に吸収し、「資本主義的エネルギーの麻痺」として作用した。(S. 413ff.) したがってゾンバルトは、初発から存在した大経営への発展可能性はこうした攪乱要因によって絶えず「抑制」されたと考えていたのである。

別の箇所ではゾンバルトは、「19世紀半ば…におけるドイツの経済生活の本質的性格は、1350年ないし少なくとも1450年のそれと本質的にはそれ程異なるものではない」(S. 484.)、あるいは「工業的資本主義は…その最初の発展の局面を終えた後に、一国の経済生活における付随的役割を果たすことを止める」(S. 654.)と述べているが、まさしくこうした初期資本主義観こそ、資本主義精神論・地代蓄積説とならんで本書第1巻の最大の特徴を成しているといえよう。彼が「資本主義の発展」を「発生的」あるいは「偶然的・経験的」にではなく、「資本主義の自然的発展」と解釈し、これを「法則的」・「理論的」に把握しようとする背景には、初期資本主義の歴史をむしろ資本主義の人為的抑制の過程と見なす歴史観が結びついていた。

さてゾンバルトによれば、「前資本主義的工業制度」の本質的特徴は「工賃手工業者をとまなう家工業的自給生産」(S. 433.)である。「ナールクスの原理」にしたがって遂行される交換経済としての手工業経済とは、農村においても都市においても、本来の意味での自家生産と自ら調達した原料の工賃手工業者による加工とに基づく自給経済である。そして自給できない生産物が、農村共同体内部の「一種のデミウルギー」(S. 440.)である独立手工業者によって、また都市の手工業者によって生産され、「年市や行商」をつうじて調達される。ゾンバルトは、農民経済、領主〔グーツ〕経済だけでなく、都市経済内部でも、ドイツでは19世紀半ばに至るまで、パン、食肉、糸巻き、亜麻織り、シーツ、服、靴などが家で作られたことを強調している。(S. 445f.)

初期資本主義の発展は本質的には、こうした「前資本主義的工業制度」内部への資本の流過程から生産過程への浸蝕を意味する。その程度に関して、ゾンバルトの総括的説明によれば、

「初期資本主義時代末期の工業生活はおよそ次ぎのような象を示している。工業資本主義は数世紀を経て確固たる位置を占めた。しかしそれ

はなお完全に手工業的組織の形態の中に生き続けている。多くの場合前資本主義的工業を直接引き継いで成立し、その存立条件を継承した。それはなおほとんど偶然的で、その存在様式は伝統的であり、依然土着的であり、その技術は経験的である。その活動領域は、出現と同時に征服した分野にほぼ止まっている。それがかろうじてようやく棲んでいるのは、かつての局地間手工業、つまり鉱山業、繊維産業、鉄加工業その他若干の工業だけである。しかしながらそれはちょうど今局地的手工業をつかみ取ろうとしているところにある。我々は、1840年代のドイツにおいて、こうした「局地的」手工業でも生じた解体の最初の痕跡を発見するであろう。最もそれは最初の痕跡であって、全体としてみれば、前資本主義的工業組織の構造はまったく無傷のままである。」(S. 423-4.)

ゾンバルトの判断によれば、1840年代にいたるまで局地間の取り引きでは資本主義は「確固たる」存在であるものの、それは流通支配のレベルに止まっており、利潤追求の土台をなす生産過程はそれに適合的な編成を取っておらず(偶然的)、手工業経済がそのまま継承されている。しかも伝統的・局地的な手工業経済はほぼ「無傷のままに」残され、その解体がようやく始まろうとしているのである。⁽³⁾

h 資本主義の前進と手工業の後退

ところで前述した本書の構成に従えば、「初期資本主義的経済組織を編成替え過程の出発点であるその最高に完成した状態において分析する」課題をもって第1巻の叙述は終わったはずである。しかしながらゾンバルトは、すでに資本主義が支配している分野での生産過程の編成換え(家内工業からマニファクチュア・工場制への移行) - とりわけ鉱山業と繊維工業において - を分析することは第2巻の課題だとしながら、初期資本主義末期から高度資本主義への「巨大な転換」「の性質と規模に関する漠然としたイメージ」を得るために、「旧い組織形態の領域における資本主義の凱進行進の叙述」(第6部)と「[この]転換の現状における概観」(第7部)が与えられるべきだと主張している。(S. 484-5.) これは具体的にいえば、1840年代末に解体を迎えようとしていた伝統的・局地的な手工業経済がその後の50年間に資本主義の侵入によってどのように変容したのかを、本書の執筆時点で確認しようとするこ

(4) ある。ある意味では本書の基本構想をはみ出したこの部分にゾンバルトの『近代資本主義』執筆の動機がはっきり表れているといえよう。前稿の「はじめに」のところですでに指摘したように、本書は方法論争と社会政策学会の世代間政策論争を克服するために執筆されたのであるが、後者についていえばそれは手工業の保護を巡る論争に他ならない。手工業の保護を無意味と考えるゾンバルトにとって、資本主義の発生とその発展の理論が提示されるだけでは不十分なのであって、そうした理論を前提として19世紀末期における手工業の現状が具体的に把握されねばならなかった⁽⁵⁾。むしろ逆に、19世紀末期における手工業の現状の具体的分析が本書を構想させたといったほうが正確であろう。というのも第6部・第7部の記述の基礎資料は、ビューヒャーをチーフとして行われた社会政策学会の手工業調査(1895-97年)であり、ゾンバルト自身「これが必要ならばそもそもこの著作は書かれることがなかったであろう」(S. 662.)と述べているからである。

ではそれはどのように描かれているのであろうか。簡単にいえば、資本主義の進展は紛れもない事実であるが、その程度は極めて多様である、ということであった。ゾンバルトはこれを資本主義の進展度に応じて、「資本に対する間接的従属のケース」、「家内工業」、「専門化された大経営」、「結合企業」という4つのレベルで考察している。まず第1の「資本に対する間接的従属のケース」とは、製パン業や建設業に見られる製造業者の信用貸しあるいは金融業者からの融資によって手工業者は独立するが、過当競争の圧力によって大きな金融業者・原料製造業者・商人、すなわち「資本家」の事実上「餌食」になるケースである。(S. 494 ff.) 次の「家内工業」は、被服産業にみられる問屋制度の展開を指しているが、この経営形態の条件は、製品の大量需要・輸送の容易性・分割された手労働への適合性・婦人労働の対象物、である。ここでは生産が資本主義的問屋主に集中する低品質の既製服などの場合(大企業化・機械工場化)と問屋制が安定的な高級仕立服との分化が見られる。(S. 509ff.) 「専門化された大経営」とは、手工業経営のマニュファクチュア・機械工場への転化を意味する。ここでゾンバルトは、大経営に適した半製品・補助材料の生産分野で12-15人の補助労働力を雇用する「中経営」を資本主義的大経営の「出発点」とし、「古い手工業的生産

領域の漸進的な空洞化が生じ、大経営と手工業が並存する長期の発展過程」を指摘している。(S.524-5) こうした大経営化は食料品(チョコレート、ビスケット、ソーセージなど)、靴・皮革・建設・工芸などで顕著であった。最後の「結合企業」は、資本主義的企業による手工業経営の吸収である。それには、生産分野の異なる手工業者と資本主義的企業者が注文によって結び付き、前者が事実上後者に支配される付属化 [Angliederung] (大工業にろくろ工が木材を供給するケース)、大経営化した補助材料の生産工程に関連する多数の手工業が吸収される編入 [Eingliederung] (鉄鋼工場に印刷・製本業が吸収されるケース)、独立手工業のいくつかの分野が一つの経営に合体する合流 [Zusamengliederung] (馬車・鉄道車両のケース)がある。これらは、かつての手工業が資本主義的企業の構成部分になることを意味する。(S.554ff)

こうしてゾンバルトは、「資本主義が工業生活の全線に渡って前進している」ことを確認するのであるが、しかしその場合彼の強調点は、以上の論述から帰結する「前進」の不均等性に置かれていた。

「手工業者の人格の周囲に過去千年にわたって成長した職業領域に代わって、おかしなほど短期間のうちにザッハリヒで合理的な観点にしたがって形成されるまったく新しい生産様式のシステムが設置された。現在ではそれは工業生活のほぼすべての分野を等しく支配している。しかし資本主義の勝利の行進が統一的な形態で生じていると即断するならば、それは誤りである。資本主義の進出に対して社会的な大経営の均等的成長は決して対応していない。極めて多くの事例において、資本主義は労働過程に全く手を触れないか、あるいはただ僅かに触れるだけである。…別の場合にはそれは社会的な大経営の形態で現れるが、それも極めて窮屈な土台の上であって、ここで大経営的發展について語る資格がないほどである。統計的には、まさに現代において増加する傾向があるように見えるのは小資本主義的企業なのである。」(S.568.)⁽⁵⁾

ゾンバルトによれば、「資本主義の前進」の内実は数量的には生産過程の変革を意味しない「資本に対する間接的従属のケース」であって、いわゆる「手工業の没落」はまだ実証できないのである。それでは手工業は現代においてその基盤を維持しうるのであろうか。

結論を先取りしていえば、もちろんゾンバルトは現代において手工業の存在基盤は失われつつあると考えるのだが、それは微妙なニュアンスを含んでいた。というのもまず農村では自給経済の減少と工業的資本主義の進出が見られるものの、なお自給経済と結び付いた工賃仕事や伝統的手工業は依然として維持されていたからである。農民経営に組み込まれている鍛冶屋や車大工は、「良い暮らしを送っており、近い将来鍛冶手工業の存在は農村では差し迫った危険に脅かされていない。」

(S.583.) また都市においても自給的家経済の縮小にともなってパン屋・肉屋は、前述の傾向にも拘らず増加の可能性を残しており、仕立業では生地⁽⁷⁾の輸入によって商人への従属に抵抗するケースも存在した。

しかしながらゾンバルトは、都市においても農村においても多様性はあるものの、「手工業の後退」と「資本主義の前進」は揺るぎがない、と確信していた。(S.615.) 農村手工業や修理・修繕部門では暫くは維持できるかもしれないが、その解体は時間⁽⁷⁾の問題にすぎない。「多様性」とはただテンポの差に他ならない。「資本主義の息が掛かっている工業部門は一つとして存在していないということである。すべてのものにうじ虫[Wurm]が付いているのである。」(S.618.) この「うじ虫」という表現は、資本主義の前進は法則的必然であるとする彼の確信の背後にアンヴィバレントな感情が潜んでいたことを表している。それは、資本主義の展開が貨幣貸付資本・商人資本による流通過程からの浸透、すなわち手工業に対する圧迫・搾取だとする彼の理解と結び付いていたといえよう。

社会階級的に見れば、手工業は19世紀末期にブルジョアジーとプロレタリアートに分解しつつあり、一部の手工業者がプロレタリア化に抵抗しているのである。彼はこのような抵抗が早晚崩れることを予想して、資本主義の前進と手工業の後退を主張したのであった。さて我々は節を改めて「資本主義発展の理論」を検討してみよう。

4 資本主義発展の理論

a 法秩序と技術

さて第2巻の課題は前述のように、「初期資本主義的国民経済の高度

資本主義的国民経済への法則的編成替えの証明」を課題としているが、それは、資本主義的精神を有する「経済主体」が自らの営利原理に従って世界をいかに創出するかを、「法則性の観点の下で考察する」することに他ならない。この場合の「法則性の観点の下で考察する」とは、資本主義の自然的発展を「因果」的に考察して、そこから発展の規則性を抽出し、それが人為的に歪められない場合、将来の発展傾向はどのような姿を呈することになるかを確認することを意味する。別な言葉でいえば、合理主義と計算性にしがって利潤を実現しようとする経済主体を初期資本主義末期という特定の歴史的条件下に置いた場合、どのような動きをするか実験的・実証的に観察すること、といってもよい。

まずゾンバルトの高度資本主義の発展の見取り図を示しておこう。注目すべきことに、資本主義的精神の発生にあたって十字軍による黄金欲の覚醒が決定的役割を演じたように、彼は高度資本主義の開始期にもカリフォルニアおよびオーストラリアの金の流入を決定的に重視していることである。彼によれば、高度資本主義は「資本金額が貴金属生産の増加あるいは…その他の方法による部分的増加によって急速かつ恒常的に拡大する」「拡張期」と「追加資本が流通手段の顕著な増加なしに純粹な過剰資本によって補われる」「収縮期」に分けられ（2.Bd., S.8.）、前者の「流通手段の顕著な増加」がカリフォルニアとオーストラリアからの金の流入によって生じたのであった。流入した貴金属は、まず既存の手工業以外の主として貨幣・信用の分野（銀行業）に、次いで交通および「以前から資本主義のものになっていた基礎的工業」（石炭・鉄鋼）に投下される。ここで形成された過剰資本が今度は輸出工業としての手工業に向けられ、最後に国内市場に製品を供給する手工業との最終的闘争に突入する。（2.Bd., S.9ff.）

こうした見取り図が、1850年代以降展開したいわゆる「特殊ドイツ型銀行」による鉄道・重工業主導型のドイツ資本主義の発展と前節で述べた手工業の後退論を重ね合わせたものであることは明白であろう。ゾンバルトの最終的狙いは、「資本主義発展の理論」によって手工業の後退の「理論的必然性」を論証することにあつた。

さてゾンバルトは、経済発展の「推進力」を、法秩序、技術、人口増加などの「客観的条件」や、個人主義、自由への衝動といった「社会的

理念」に求める見解を批判しつつ、改めて「社会的行為にとって有力に作用する推進力ないし動機」は近代的経済発展の場合「資本主義的利害の主張」であることを再確認する。(2.Bd., S. 4ff.) これにそって「客観的条件」や「社会的理念」が適合的に編成されるのである。彼によれば、「資本主義の法的表現」が、営業の自由、自由競争システム、個人主義的法秩序であり、その本質は多様な内容をもつ自由権(営利・契約締結・所有・相続)の保証であった。その場合ゾンバルトは、こうした法システムがなんらかの「社会的理念」の表現ではなく、資本主義の「利害」の観点からする妥協の表現であることに注目する。

「各々の生産者の自然的な法の理想は、独占、すなわち自分には自由、他者には強制・制限である。もし彼がこれとは別の秩序に賛成だという場合、こういうことが生じるのは、彼が自分の理想が実現できないと考えるから、すなわち彼が少なくとも…自分にとって問題となるものの若干を自分のために救い出すために、妥協を承認するからである。経済形態の本質はこうした妥協の結果を決定する。これが手工業者にとってはツンフト秩序であり、資本主義企業家にとっては営業の自由である。」(2.Bd., S. 29-30.)

手工業者は「ナールンクの原理」にしたがって生存条件の安定を指向するから、自己の自由を譲歩して他者の制限を受け入れるのに対して、資本主義企業家は経済領域の無限の拡張を指向するから、自己の自由を確保するために他者の制限を犠牲にするのである。このことは営業の自由が資本主義を生み出したのではなく、その逆を意味する⁽⁸⁾。「営業の自由は資本主義的精神に最も適合的な経済秩序である」としても、「資本主義はその法とのみ共生できる…と仮定することは完全な誤りである。」工業的資本主義はツンフト法の下でも抑制されなかったし、営業の自由は手工業を増加させることによって、資本主義発展に対する「障害」を生み出すのである。ここでゾンバルトがいたいことは、「法の過大評価」に対する批判であった。

さて資本主義的利害に適合的な法秩序が営業の自由だとすれば、資本主義的生産の技術的基礎は、手工業の人格に付着した経験的・偶然的な技術とは対照的な、非人格的な「合理的技術」に他ならない。ゾンバルトは、人間の能力の限界を突破した「機械」の意義をマルクスにしたが

って高く評価する一方、「機械の時代」の本質がむしろ「科学の技術への応用」にあることを強調する。技術の経験的方法が「労働遂行」という「目的論的」観点の下で行われる「技芸的方法」だとすれば、「合理的方法」は「生産過程をも自然のプロセス」とする「因果的」・「法則」的方法である。したがって技術の所有は、前者の場合技術的能力が「親方の人格の中にしまい込まれ」るのに対して、後者では「だれもが任意に把握でき、到達しうる知として実行的人格の外側に自立化・客観化」し、「言語と文書による固定化をつうじて将来の世代にとっての不朽の財産」となる。このことは、科学技術の探求が「専門研究者の職業労働」へと移行し、その利用を「場所・時代に拘束された特定の個人」から解放することを意味する。それは、技術的能力の存続と増大から「純粋に人格的なものの偶然性」が取り除かれ、「現代における技術的遂行の矢継ぎ早の革新 [Neugestaltung]」ばかりでなく、「計画的な」「全産業における生産の攪乱のコントロール」が可能になる。(2.Bd., S.63-4.) 以上のようにゾンバルトは、18世紀後半から始まる一連の技術革新をマルクスのように相対的剰余価値生産のレベルではなく、人格から切り離され無限の貨幣増殖を指向する資本主義企業の発展の適切な基礎として把握し、絶えざる技術革新⁽⁹⁾と生産の計画化の可能性の拡大という観点からこれを評価したのである。

b 経済と文化

ところで絶えざる技術革新は、「可能な限り高い利潤の獲得」を目指す資本主義企業家にとっては、競争という条件の下で一方における新生産方法の導入によるコスト低下・生産力の増大と他方における市場の過剰・販売条件の悪化、という「二律背反」を生み出す。

「資本主義的企業の最大の強みは、…そこに刻印された計算の厳密性である。…他方でこの努力が首尾一貫して遂行されると、経済主体の意図とは反対の帰結が生ずる。極端な主観的合理主義と対応するのは、景気循環の上向・下降運動によって、また価格の絶えざる変動によっていかなる予測可能性も予定も効力を失う価格形成の絶対的・客観的な非合理性である。したがって計算の対極として必然的に投機が形成され、それは後の需要の評価のみならず、…後の生産条件あるいは生産の変革の

評価にまで及ぶ。そのため将来の価格形成の計算不可能性と経済遂行の投機は、財の生産開始と消費との間の期間の長さが増大するにつれて、同時にこの期間のうちに生ずる生産の変化が頻繁になるにつれて増大する。」(2.Bd., S. 69.)

これはベーム＝バヴェルクの「迂回生産」理論を企業家の側から不確実性の増大ととらえ直したものである。したがって資本主義の発展が迂回生産の延長を不可避的にするとすれば、企業家は計算不可能性の増大に対して、自己の生産・販売過程の時間的短縮によってこれに対抗するであろう。それは「生産期間と流通期間の短縮」、つまり流動資本と固定資本の回転の加速化を意味し、それはまた流動資本の固定資本による代替(機械化)をもたらすであろう。マルクスの表現では、「資本の有機的構成の高度化」である。(2.Bd., S. 71f, 79ff.⁽¹⁰⁾)

ゾンバルトはこの帰結から二つの結論を引き出している。第1に、技術進歩が生産期間の短縮だけでなく、流通機関の短縮にも利用されるから、資本主義の発展は、商業の大規模化、商業・金融技術の発展、輸送・通信技術と制度の発展をもたらすことである。(2.Bd., S. 73ff.) 第2に、「資本の有機的構成の高度化」が意味することは、「経済過程における人的生産要素に対する物的生産要素の優位の増大、生きた労働に対する過去の労働の、すなわち現在に対する過去の支配のいっそうの拡大」(2.Bd., S. 82.)である。

こうしてゾンバルトは、高度資本主義時代に生産過程の再編に対応した流通の革新とインフラストラクチャーの整備が「法的に」推進されることを指摘する一方、高度資本主義の経済・技術の発展が、「近代文化の全様式」を規定することを強調する。それは簡単にいえば、技術による「物質 [Materie] の克服」がむしろ「全体の経済プロセスの事象化 [versachlicht]」、 「人格を犠牲にした圧倒的な物質的 [sachliche] 文化」、 「物質的文化要素の過大評価」をもたらしたこと、「空間の克服」によって精神が「無限性のイデー」を所有し、「地域性の相違」を極小化して、生活慣習・仕事・嗜好の平準化」を生み出したこと、「時間の克服」が「時間の価値の増大」を生み、「欲望の増大」ともあいまって「生活遂行の加速化」をもたらしたこと、である。(2.Bd., S. 83-6.)

このようにゾンバルトは、ベームの迂回生産論やマルクスの資本の有

機的構成の理論を資本主義の発展が生み出す文化変容、いわば「資本主義文化」を問題にする「発見的手段」に転用したのである。「高度資本主義的国民経済への法則的編成替えの証明」とは、単なる経済発展だけを法則的に把握するのではなく、経済・技術・法・文化という客観的「世界」の総体的把握を法則的に行うことであるといえよう。そして上述の近代文化論は、「資本主義文化」を批判するというよりも、後述するように、近代の文化様式が資本主義経済に及ぼす逆の影響——「奢侈」の経済的意義——を問題とする観点から行われたのである。

c 農業における資本主義の形成と近代都市の成立

ゾンバルトは第2分冊「経済生活の新形成」の叙述を「近代的農業の成立と土着的経済制度の解体」というタイトルで始めている。これは一見すると資本主義の発展の端緒を農業に求めているかのような印象を与えるが、これまでの論述から明らかなように、彼はそうした発想を持っていないし、自らもそれを否定している⁽¹¹⁾。ここで彼が展開しようとする問題は、工業資本主義の発展が農産物価格の上昇をもたらし、農業への営利経済の侵入と自給（欲求充足）経済の解体が高度資本主義の前提条件であるプロレタリアートを創出することの論証にあった。

さてゾンバルトによれば、農産物価格の上昇は、18世紀半ば以降「イギリスにおける工業資本主義の発展⁽¹²⁾」と共に始まるが、初期資本主義末期の「ドイツにおける工業資本主義の拡張によって始めて」本格的になった。それは「生産者に営利衝動を目覚めさせ、…勞せずして利得をもたらす宝の分け前にあずかろうとする欲求を作り出す。だがこうした感覚の変化は、農業者の場合経営全体のとくに重要な改変を意味する。というのも…合理主義的・資本主義的精神の侵入によって、…従来は身分に適った暮らしの足場・土台だった土地を、…可能な限り高い純益を生み出す『レンテ源』と見なすようになるからである。この目的のために彼は必要な経営手段を準備しなければならず、…『資本』を受け入れねばならない。」(2.Bd., S. 99.)

ゾンバルトは、この過程がイギリスでは資本力を有する資本主義的企業家による土地の借地化として進行したのに対し、ドイツのような「後進諸国」では「予備企業家」が欠如していたため、土地所有者の資本主

義的企業家への転化を指摘している。

さて資本主義的精神の農業への侵入の結果は、農業の集約化に表現される「合理的農業経営」の展開であり、価格上昇の下で純益の増大による地代・地価上昇である。それは農業生産の差別化 (ex.作物の交替) と立地の変化 (ex.山林経営の周辺化) をもたらすとともに、他方では家父長的・有機体的な農業労働制度の再編 (季節労働者への依存) と農村共同体の解体 (共有地利用に依存する小農経営・副業の減少) によって、農村労働者のプロレタリア化・流動化と農村過剰人口を招来する。初期資本主義以来展開された農村における問屋制家内工業は、最初は農村副業に、後にはこうした過剰人口に支えられたものであった。(2. Bd., S.102-134.) しかしゾンバルトは資本主義の侵入による自給経済の解体の過大評価に懐疑的であった。

「家内工業的自給生産は、たとえ社会的・平均的生産性がかなり下回っていても決して中止される必要はない。たとえ私が『社会的に必要な』支出の10倍もの費用で自分で製本したり、自宅の壁を自分で塗っても、『市場法則』はこれを妨げることはできない。…私は、伝来の手工業的生産様式に強く固執し、あらゆる資本主義適合理性に抵抗する本来の農民経済の場合には、合理的経営の形成から帰結する原因の重みを…過大評価したくないのであって、むしろ多くの場合、旧い農民家族は外側からとどめを刺された⁽¹³⁾と考えている。」(2. Bd., S.143.)

この「外側から」の「とどめ」とは、「新しい革命的な個人主義精神」(2. Bd., S.144.) である。その意味は「新しい人格の理想、すなわち快適さと生の喜びを求める新しい基準」であり、その担い手は資本主義の前進によって成立した「近代都市」であった。(2. Bd., S.145.) ゾンバルトによれば、農業における資本主義の発展だけでは、伝統的農業の一定の解体と農村過剰人口の形成は説明されるが、過剰人口の移動とプロレタリアートの成立の「必然性」は証明されないのである。したがって資本主義の発展と近代都市形成・個人主義成立の因果的「必然性」が論証されなければならない。

まずゾンバルトは、資本主義の発達と歩調を合わせて、19世紀後半以降の都市人口の急速な増加と衛星都市を含む経済単位としての「大都市化」が進行している事実を指摘し、「支配的経済システムと都市現象の

必然的関連」・「資本主義のシステムにおける都市の本質」を問題とする。近代都市の原形はもちろん初期資本主義時代に見られるのであるが、すでに論じたように都市の富〔購買力〕の源泉としての商業利潤・工業利潤は小さかったため、「初期資本主義における都市拡大の本源的様式」は、農村貴族の都市化（土地レントナー）と君侯の財政経済（国家レントナー）を基盤とする「奢侈生産者」の集合である。（2.Bd., S.196 ff.）しかしこれは前章での彼の理解によれば、資本主義的發展を抑圧するものである。

ゾンバルトによれば、高度資本主義時代への移行によって初めて資本主義的工業が「都市形成力」を持つようになる（工業都市）。その理由は、分散的家内工業から社会的な大経営が成立し、企業の集中化（分散していた経営体の一か所への集中）や経済的・経営的観点からの様々な関連産業の集中が生じるからである。そして工業部門生産の急速な増大は、自給経済をさらに駆逐することによって工業人口を増加させ、「工業生産の拡大によってのみ満足させられることができる生活の快適さに対する要求の増大」を引き起こす。（2.Bd., S.210-13.）つまり大経営の成立と企業の集中が工業人口を集積し、工業都市の發展が累積的に工業人口を増大させるのである。

ゾンバルトは、工業都市をプロレタリア・技術者・企業職員が居住し、労働所得が購買力として放出される「工業的部分都市」（労働者都市）と、労働者と共に企業家が居住し、企業家利潤が放出される「工業的完全都市」に分類する。後者は企業家利潤を所得とする「富裕な住民」のために多様な「納入業者」が来住して成長し、「国家レントナー」（官僚と軍隊）の中心地となり、商業・信用機能が充実して、「大都市」となる。しかし大都市では地代・地価が上昇するから企業は周辺の小都市に移動し、商業・交通都市と信用業務を中核（「資本主義的指令基地」）とする消費都市としての大都市に分化する（中心部では人口が稀薄化する）。これがゾンバルトのいう「都市の自然的發展」である。（2.Bd., S.215-24,249f.）

「資本主義の内的深度と外延が大きくなるにつれて、必然的に国民経済的余剰価値のますます大きな部分が近代的交通の中心地、すなわち大都市に収入として集中して現れるようになる。大都市はますます消費

費の中心になる。」(2.Bd., S.221.)

このように彼の都市形成論は、資本主義の発展が消費センターとしての大都市を生み出す必然性を論証しようとするものであった。したがって労働者の都市への移住は、工業都市の発展による雇用の増大、大都市におけるサービス労働力需要の増加、都市における実質的高賃金の可能性⁽¹⁵⁾といった経済的契機によって規定されるとともに、消費センターが及ぼす「精神の革命」に決定的に規定されていた。

「私は、一言でいえば個人主義的解放と特徴づけられる都会人の生活態度の変化を考えている。…都市生活を刺激的なものにするのは個人の自由に対する欲求である。かつて山上にあった自由は今日では都市に移り、その後を大衆[Masse]がついていった。酔っ払うことができた、一番好きなものを選ぶことだけが自由ではない。それなら農村の人々も都会人同様にできる。広い意味で人格の自由を刺激的なものにするのは、なによりも一否定的に表現すれば一血族・地縁・支配からの自由なのである。…自由の理想はまず都市の発展を通じて大衆の理想となった。都市が初めて個人を解放し、都市が成長するにつれて、個人的自由の価値に対する大衆の感覚が増大する。」(2.Bd., S.237-8.)

個人が故郷のしがらみから解放され、大量に都市に流入して高賃金を背景に自由な消費主体となる社会を「大衆社会」と呼べば(もちろん彼はこの言葉を使っていない)、ゾンバルトはまさしくこうした状態が実現されようとしている入り口に立っていた。彼は資本主義の発展が消費センターとしての大都市の発展を惹起し、そこで発達する「個人主義的自由」と「大衆社会」状況が農村過剰人口を吸引すると考えたのである。

d 消費＝需要の理論

ゾンバルトは、大都市における「大衆社会」が同時にガルブレイス風にいえば「豊かな社会」であることを力説する。1840年代と19世紀末を比較すると、かつての市民的中産層の「手堅いが、…みすぼらしい」暮らしに代わって、「現在では富、華美、豊富があたりまえになり、「購買力ある大衆」が成立した。(2.Bd., S.258.)

「二つの時代を偏見なく評価すれば、この50年の間にすべての階級の生活水準が著しく上昇したことは疑い得ない。…中産層の消滅はまった

く通用しないおとぎ話である。資本主義的發展はまさしく夥しい数のこのような中間的存在—小資本主義的企業者・高級職員・エージェント・支配人・裕福な商店主・飲食店主—を生み出す。そして国民の豊かさの増大は、新たに生ずる種類の職員が心配なく暮らすことを、物質的・精神的サービスの供給者に益々豊かな報酬を与えることを可能にする。」

(2. Bd., S. 268.)

そしてゾンバルトは、中間層の増大と経済のサービス化に伴う豊かな大都市の大衆を、寄席に通い、スポーツクラブに参加し、競馬に夢中になる、いわば消費とレジャーを謳歌する存在として描いている。

ところで彼がこうした購買力の増大と消費の拡大の意味を把握するために使用するキー概念が、「洗練された需要 [Feinbedarf]」あるいは「需要の洗練化 [die Verfeinerung des Bedarfs]」である。それは簡単にいえば、ブルジョアジーにおける「奢侈」と中間層へ向かっての「奢侈の民主化」であつた。⁽¹⁶⁾

さて「洗練された需要」とは、需要される財が消費の「快適さ」を高めるために、素材と形態の面で「高価な」「本物」を追及し、「芸術好み」の「嗜好の洗練」化の方向に発展することである。それは「感覚的」・「芸術的・非倫理的的文化」であり、具体的にいえば、1890年代半ばから展開され、ルネサンス再評価と結び付いた新世代の芸術家、いわゆる「美的モデルネ」⁽¹⁷⁾による都市建造物・住宅あるいは家具・装身具の装飾・デザインであつた。

「重要なことは、趣味と教養を豊かに持つ裕福なブルジョアの第2・第3世代が次第に成長し、ユダヤ人の孫や曾孫が徐々に芸術市場の買い手として現れることである。富の増大と共に、国民の精神的エリート—高い『教養人』—も洗練された物質文化に参加することができることも重要である。さらに重要なのは、国家・州・都市が自己の需要を充足する際、ますます大きな資金を投じて、美しいもの、華やかなもの、必要ではないものの余地を残していることである。だが最も重要なことは、あらゆるこうした変化の結果として人生観が被った変動である。…それは、現世の目に見えるもの、外界の事物の美しい造型、生の喜びと享受に対する感覚を目覚めさせる。」(2. Bd., S. 300.)

こうした事態の進展は、一方では資本主義的生産の観点から見れば、

富の「非生産的目的」への浪費を意味するが、他方では資本主義的芸術産業の発展を促し、「技術と民主主義によって、国民のますます広い階層が芸術産業の成果に分ち与かることを可能にする」(2.Bd., S.314-5.)であろう。

これが「奢侈の民主化」である。それは、「洗練された需要」財の購買者が増大し、「奢侈」品が「大衆品」となることを意味する。「奢侈」の大衆化は、資本主義的発展がもたらす「需要の統一化」⁽¹⁸⁾を背景にして、「嗜好の画一化 [Uniformierung]」を招来する。

「近代資本主義の発展によるあらゆる身分的・地方的存在の解体は、あらゆる嗜好の平準化 [Nivellierung] をももたらす。今や服装や住宅の調度も、その他のいかなる需要財も、その特徴は社会生活の大中心地である都市から全国に向かって規制される。ここで大規模生産者の利害が促進されることも確かである。しかしながら全体的にみれば、このような嗜好の統一化はやはり総体としての経済発展の必然的帰結である。それから、大都市の存在が需要自体の性質を根本から革新したことに注目することが重要である。…そのプロセスを私は…需要ないし消費の都市化 [Urbanisierung] と呼ぶ。我々の使用財に対する要求は別のものになり、…有用なもの・美しいものに関する価値判断も変化する。だれもが特定の観念を農民的な嗜好と都市的な洗練された嗜好の表現と結びつけている。その違いを一言で表現すれば、無骨なもの、頑丈なもの、長持ちするものを好む感覚が減退し、それに代わって、感じの良いもの、軽やかなもの、優雅なもの、シックなものに対する快感が現れる、ということができよう。」(2.Bd., S.324-5.)

すでにゾンバルトは、科学技術の発展が「生活慣習・仕事・嗜好の平準化」を生み出す可能性を指摘していたが、ここではそれが「贅沢の民主化」と都市化によって現実化することを確認する。それは大量生産体制という資本の生産論理の直接の帰結ではなく、それを通じて実現した「豊かな社会」における需要・消費の側の「価値判断」の変化の結果であった。このことは、利潤の実現を目的とする経済主体の「資本主義的利害」を「推進力」とする資本主義の発展が、この段階にいたって、消費主体の主観的効用あるいは満足⁽¹⁹⁾の極大化という原理によって牽引されるようになったことを含意するものではないだろうか。

ゾンバルトは、新しい消費感覚を持つ人々を「新人類 [ein neues Geschlecht von Menschen]」と呼び、その特徴を次のように描写している。

「[彼らは] その内面の飽くことのなさと不安定さを表現し外界を造り上げようとする人間である。我々は使用対象の変化を欲するのである。それは、同じ洋服を自分とその周囲にいつも見ると、我々を神経質にする。変化の欲求が人間を支配し、それが高じて時には旧くなった消費対象をぞんざいに扱うことになる。…しかし成長しつつある世代には、かつての時代の『涙もろさ』も『感傷癖』もない。彼らは非情になり、人間と日々の使用対象との関係も、——我々の両親の部屋には…あったが、現在では孫の華やかなサロンには…欠けてしまったあの暖かさもたらした——情緒豊かな、ロマンチックな魔力 [Zauber] を脱ぎ捨ててしまった。」(2.Bd., S. 329.)

ゾンバルトは、人とモノとのこうした「非情」で合理的な関係の上に、資本主義的企業の激しい競争を推進力とする急速な「流行 [Mode]」の変化が生じることに注目する。まさしく「流行は…資本主義の最愛の子」(2.Bd., S. 349.) ⁽²⁰⁾なのである。

以上のような需要=消費の変化は、それに対応した財の販売=商業の編成替えを引き起こすことになる。ゾンバルトの記述の要点だけを摘記すれば、それは、商人層の増加（商業に就こうとする人々の意欲の増加、手工業の解体によるそのための人的資源の増加、彼らに営業を可能にする新しい信用・販売形態 [ex.セールスマン] の創出）、旧い商業形態の後退（メッセ・行商の衰退）、新しい営業原理の登場（広告の必然化・薄利多売の一般化）、小売業の集中化（デパート・チェーンストア）・消費の組織化（消費協同組合）の出現、などであった。

e 工業的競争の理論

さて本書の末尾を飾るのは、第3分冊「工業的競争の理論」である。読者はここで「競争」の問題が現れることに違和感を覚えるであろう。というのもここまで展開された「資本主義発展の理論」は市場における競争を前提としており、もし競争についてコメントする必要があるれば、発展理論の最初の序論に置かれるべきではないか、と思われるからであ

る。ゾンバルトが論じているのは競争一般ではなく、むしろ競争のそのような扱いを批判するためであった。彼は、冒頭でシュモラーの『19世紀ドイツ小営業史』[1870]を引き合いにだし、次のように批判する。

「シュモラーなどの人々が、『自由競争の下では経営のいかなる技術的改良も力を持つに違いないし…経営のいかなる技術的改良も文化の真の進歩である。したがって我々も、大経営の無慈悲な成長を見守るのである』と考えるとき、それは、『自由な競争の下では』少なくとも経済的理性 [Ratio] が貫徹する、という見解を信奉する、全体として自由貿易的・楽観的な時代把握の表現にすぎない。しばしばその反対を観察している現在の我々にとって、かのテーゼは依然として立証責任を負わされているのである。」(2.Bd., S. 424-5.)

ゾンバルトの見るところでは、シュモラーとその世代には、自由競争＝技術進歩＝大経営の発展という経済の自然的発展（経済的理性の貫徹）の中に文化進歩を認める楽天的な信仰があり、したがって小経営の大経営による駆逐は「経済的理性の貫徹」の結果として理解される。しかしゾンバルトの世代は「その反対」を観察しているという。文章の脈絡からいえば、「その反対」の観察とは、「自由な競争の下で経済的理性は貫徹していない」ことを示す事実を観察している、という意味であろう。これは、小経営（ゾンバルトの表現では手工業）が経済的理性に則って行動していないこと、すなわち手工業が資本主義の発展に抵抗している事実を指している。だから「かのテーゼは依然として立証責任を負わされているのであり、「大経営と小経営の競争…[という]二つの経営形態の競争ではなく、手工業と資本主義的企業という二つの経済形態の競争が問題なのである。」(2.Bd., S. 430.)

ゾンバルトによれば、競争とは「自然的事実」ではなく、2人の経済主体の生計が市場における生産物・サービスの販売に依存し、「顧客をめぐる闘争」を行い、その闘争を「陪審員」が決定する「社会現象」である。したがって競争が実現するためには、職業的特化・専門化によって市場での財の販売が「強制」されていること、価格競争が行われる場合には財が任意に増加しうるものとなっていること、生産・輸送技術のあるいは人口の量的・質的な一定の発展によって「自然独占」が成立しないこと、品質の改良・価格低下が個人的偶然から解放され、だれでも

原則的に可能となっていること、を前提とする。このような社会的条件が満たされた上で、競争に勝つということは、「陪審員」の要求を正しく評価する能力を持つことを意味するから、競争の勝者は「陪審員」の要求に、もう一方の経済主体よりも品質の改良・価格低下に関して大きな「適応能力」を有していたことを表す。(2.Bd., S.424,426.)

つまりゾンバルトは、競争の客観的条件と主体的条件(適応能力)から資本主義的企業と手工業の競争の帰結を「立証」しようとするのである。ところで、すでに再三再四論及されているように、手工業は「経験的(偶然的)・伝統的技能」を基盤として「欲求充足」・「ナールンク」を指向する「経済原理」＝「経済形態」であり、資本主義的企業は経済主体の合理性・計算性を基盤として「無限の営利」がシステム化された「経済原理」＝「経済形態」であるから、この問題設定は彼の概念規定の最初から結論が出ているといってもよい。手工業はそもそも競争の客観的条件を十全に作り出すことは本質的に不可能であり、主体的な「適応能力」を欠いたものとして概念化されているのであるから、資本主義的企業の勝利は必然である。では彼はなにを「立証」しようとしたのであろうか。

ゾンバルトは論述の開始に先立って、競争の勝利が意味する類型論を展開している。それを簡略化していえば次のようになる。

- I 改善された業績によって (A—供給 [方法] の改善によるか、
B—品質の改善によるか)
- II 価格の引き下げによって (A—形式的にか、B—実質的にか、
Bはさらに、a—原料・形態の代替によるか、b—コストの低下によるか)

彼はこれらについてその内部でさらに細かい分類を展開しつつ、様々な業種を例示して議論を進めているが、それを説明するために、IのAのケースを取り上げてみよう。

例えば多数の製品供給・仕事・サービスが組み合わされている建設業の場合、個々の製品供給や仕事は手工業によっても良好に提供されうる。しかし一定の期間のうちに大きな建築を遂行しなければならない現代の都市では、製品の統一性・大口の注文への速やかな対応・納期の厳守などの点で、「厳密に締結された条件」を考慮できる商人的・統一的指揮

機能を持つ資本主義的企業の優越性は明らかである。また「流行」が頻繁に変化する部門では、企業は商人的能力によってそれを敏感に察知するだけでなく、「資本の非人格性」・「生産指揮者の人格からの技術的機能の分離」のゆえに「創造的革新 [initiative Neuerung] …あるいは革新の模倣」によって柔軟に対応可能であるのに対して、手工業は「適応の困難・緩慢さ」をその本質とする。(2.Bd., S. 432-6.)

こうした資本主義的企業の優越性に関して、ゾンバルトは「大経営が必要であるということではない」(2.Bd., S. 432.)と指摘しているように、競争において大経営が優越しているのではなく、資本主義的企業の企業家の機能と能力のゆえに優越している、という主張が彼の中心的論点である。例えば、IのBのケースでは、品質改善のためには合理的生産方法の利用や高度な技術の利用とならんで、「高度な資格を持つ労働者の利用」が不可欠であり、ブリキ加工業のように機械を用いず、品質改善がもっぱら労働者の能力に依存する場合もある。ここでは労働者の手工業的「個人的・経験的能力」が決定的に重要である。資本主義的企業家は、その資金力によって高賃金で能力ある労働者を雇用して、能率の高い生産過程の能力に応じた分業的編成(差別化)が可能であるから(職工長への上昇の可能性)、労働力をめぐる競争でも優位に立つ。(2. Bd., S. 441-50.) この場合は、企業家の資金力と労働者の能力に応じた生産過程の合理的編成能力が優越の原因である。

以上の論述から明らかのように、ゾンバルトは資本主義的大経営と手工業的小経営の競争を問題にしたのではなく、資本主義と手工業が競合する規模の小さな経営分野での競争を問題にしたのである。彼の主張は次の記述に集約されている。

「商人的能力を持つ手工業者はもはや手工業者ではない。これが認識できないのである。商人的才能を有する人が問題なのか、それとも技術的労働者[手工業者]が問題なのかに応じて、淘汰[Auslese]のメカニズムがまったく違うことが把握されていない。手工業者の性格を脱却し、商人的生産指揮者となる能力を有する多数の有用な人々が手工業者層の中から上昇しうること——小資本主義的企業家——、このことは、商人的資質を持つ手工業者——[資本主義の発展に]わなわな震えている小心者——を可能な限り保持すべきだ、というはなはだしく無意味

な主張の正しさをなんら証明するものではない。」(2.Bd., S. 465.)

これがシュモラーに対する批判であることは明白である。周知のようにシュモラーは前記『19世紀ドイツ小営業史』の末尾で、「いまだ残存している手工業者階級の可能な限りの保持」を主張していた。彼は社会政策によって「いまだ残存している手工業者階級」に企業家能力を教育的に付与しようと考えたのであるが（手工業者の保護）、そうした政策的保護は、ゾンバルトによれば、「はなはだしく無意味な主張」にすぎない。というのも「商人的才能を有する人」の企業家への上昇は、資本主義の「自然的発展」に内在する「淘汰のメカニズム」によって実現されるのであって、「商人的資質を持つていても「わなわな震えている小心者」の手工業者は、たとえ「政策的」に保護されたとしても「淘汰のメカニズム」の中で没落せざるをえないからである。⁽²¹⁾

「近代的技術がもたらすものは、…小資本主義的存在の増大である。しかしこれは手工業の再生を表すものではない。むしろそれはますます急速に手工業を解体することのみに役立つ。というのもかつての手工業的活動から成長したそれは、大資本主義的企業よりもさらに急速に手工業を本来の生産領域から駆逐するからである。」(2.Bd., S. 538.)

価格競争論の末尾に記されたこの文章は、一見すると手工業が根強く残存し、場合によっては拡大しつつあるように見える現象が、実は手工業者の「小資本主義的企業家」への上昇に他ならず、それはまさしく手工業の没落を意味する以外のなにものでもない、というゾンバルトの主張を象徴している。したがって彼にとって手工業が速やかに没落しない理由は、競争に対する「障害」が存在するからだということになる。それは、一方では一部に存在する「富の水準」の低さ、「大衆の、とくにドイツ人の辛抱強さ」と「文明化」の遅れ(2.Bd., S. 541f.), 生産協同組合によって手工業は競争可能だとする「妄想」であり(2.Bd., S. 544.), 他方では若年労働力(徒弟)の「搾取」(2.Bd., S. 566ff.)を許容する立法の不備である。つまり彼が最終的に「立証」したかったことは、競争に対する「障害」の存在によって没落すべき手工業が存続しているということである。したがって本書の結論は、前者の「障害」に対しては資本主義の発展の一層の促進を要求し、後者に対しては労働保護立法の手工業への適用と徒弟養成とは切り離された職業予備教育の

要求することにあつた。(2.Bd., S. 579-81.) 第1巻の終わりで展開された手工業の現状把握では、ゾンバルトは手工業の後退を慎重に確認しつつ、その没落が不可避だと確信したが、第2巻の終りでは、発展理論の成果に基づいて、手工業の抵抗が競争の「障害」の結果であることを抉り出し、政策的対処の方向を提出したのである。

5 おわりに

以上我々は、かなり詳細に初版『近代資本主義』の内容を検討した。その結果まず目に付くのは、その特異な構成である。本書は、資本主義の発生史と資本主義発展の理論から構成されているが、実質的には、第1巻と第2巻の終りにくる現代の手工業論の3部構成になっており、その目的はシュモラー批判とそれに代わる社会政策の提起であつた。彼自身述べているように、本書の執筆のきっかけは、社会政策学会の手工業調査であり、手工業の現状と将来を展望するため本書が構想されたといつてもよいであろう。最初に指摘したように、ゾンバルトは「資本主義」の歴史・理論・政策におよぶ体系的分析によってシュモラーの「倫理的経済学」乗り越えようとしたことが、再び確認されなければならない。方法的には彼は、発展の「最終原因」である人間の動機から、「倫理的なもの」を完全に追放した。世紀転換期におけるドイツのアカデミズムで、ゾンバルトの問題提起をポジティブに受け止め、「資本主義」概念を肯定的に取り上げることは、なんらかの形で彼のシュモラー批判とクロスセザるを得ないのである。

全体を通読して感じられる本書の特徴は、資本主義的精神論、地代蓄積説、都市形成論、「奢侈」論といった耳目を引く魅力的なキャッチフレーズが畳み掛けるように提出され、夥しい材料を明確な概念によって整序し、それを法則的に構成しようとする強い意志である。それはシュモラーの細目的歴史研究の対極にある「理論的歴史」の指向であるといえよう。その意味では当時の読者は、ゾンバルトの意図がなみなみならぬものであるとの印象を持ったのではないだろうか。

しかしながら他方で、ゾンバルトが考案した上記の様々な概念が、19世紀末の時代状況を色濃く反映していることは否めない。ドイツではこ

の時期にいたってようやく、伝統的な手工業・農民経営を基盤とする共同体的生活様式が、商人・貨幣資本の侵入によって外側から本格的に解体しつつあった。農村・小都市への営利原理の侵入、大都市化、都市における地代・地価の上昇、科学技術の急速な発達と大企業の成長、これらのインパクトが、商人・貨幣資本の侵入による資本主義の成立、営利衝動に合理主義・計算性を追加した「資本主義的精神」論、都市の地代蓄積による本源的蓄積論に、また都市化と大衆社会の成立を機軸とする資本主義発展論に影を落としていることは明らかであろう。そして初期資本主義の発展がほとんど無視されていることは、ゾンバルトが高度資本主義時代に目を奪われていたことを間接的に示している。彼が『近代資本主義』というタイトルで問題としたのは、まさに高度資本主義の「現代」の「最新の」局面であり、『近代』という意味の中に、中世から近世という意味での近代というよりも、むしろヨーロッパ「近代」社会が19世紀末に迎えた「モデルネ」の時代に重点が置かれていたのである。そして「モデルネ」に対する彼の態度は、アンヴィバレンツを孕みながらその負の側面に対する「価値評価を抑制⁽²²⁾」し、この時点ではその将来の展望を楽観的に描いていたといつてよいであろう。

このようにテーマを現代に引き付けすぎたために、経験的・理論的歴史研究としては逆に重大な問題点を持つことになった。発生史は「偶然性」においやられ、発展が「法則性」に還元される構成は、歴史と理論の統合の試みが十分に成功していないことを示している。発生と発展の端緒につねに貴金属の流入が過大評価されているのはそのためだといえる。そうした根本的問題以外に、次の個々の論点を指摘することができるだろう。

- 1 資本主義と手工業という二分法的概念構成を提出したが、営利経済一般と資本主義の区別が明確でないこと。
- 2 資本主義的精神の担い手の探求が放棄され、地代蓄積説との整合性を欠いていること。
- 3 初期資本主義の長期的過程はもっぱらその抑圧の観点から問題とされ、むしろ初期資本主義の発展の欠如が強調されていること。
- 4 資本主義発展の理論では、経済発展の法的・技術的予件の分析と経済発展が引き起こす文化を含む「社会現象」の因果的關係が

問題とされ、タイトルから予想される理論経済学的意味での発展理論ではなかったこと。

理論と歴史の統合の再検討という根本問題を底流にしながら、こうした問題点がむしろ本書刊行以後の研究方向を規定したのであって、ヴェーバーは直接には主として1と2に、シュンペーターは4に⁽²³⁾、そしてゾンバルト自身は3に関心を向けたといえよう。

ところで本書の成立に対するマルクスの影響についてみれば、ゾンバルトがこの時代「マルクス主義者」⁽²⁴⁾だったとか、唯物史観の信奉者だったというような判断は、誇張された表現であり、かえって事柄の真相を隠蔽する解釈であるように思われる。もちろん彼は決定的なところでマルクスの影響を受け、重要な概念を借りたり、それをヒントにしているが(労働価値論と価値法則の貫徹、経済主体としての資本家、推進力としての利潤追求、資本の本源的蓄積、資本主義の出発点としての商人資本と貨幣資本、資本の有機的構成の高度化)、そのほとんどはここで紹介したようにマルクスの本来の意図とは異なって「思考の補助手段」として利用され、その内実が換骨奪胎されているといつてよい。とりわけ高度資本主義時代の分析視角は、レクシスとベームの論争から得られたものであり、物質文化の論述にはしばしばニーチェが批判的に言及され、大衆社会論には、ジンメルとテンニースの影響が色濃く見られるのである。しかも中産層の増大と富の大衆化を本質とする高度資本主義のデザインは、マルクスの窮乏化論と完全に対立している。そして資本主義的精神を発展の推進力とする構想は、歴史の発展に対する精神の規定力の表現に他ならず、逆に高度資本主義の発展が文化と個人主義的精神を含む社会の総体を法則的に規定するとの見解は、ほかならぬ唯物史観である。つまりゾンバルトは、史的観念論と史的唯物論の対立の地平を越えたところに立っていた⁽²⁵⁾。1902年の初版『近代資本主義』は、このようなものとして世紀転換期のドイツの社会科学者の前に現れ、学会にセンセーションを引き起こしただけでなく、彼はアカデミズムの外側に広がる「教養市民層」のスターに踊り出たのであった⁽²⁶⁾。

〔注〕

- (1) 前稿の目次を紹介した箇所(8ページ)で第7部が欠落していた

ので、おわびして訂正しておきたい。

- (2) 全2巻の『近代資本主義』第2版(1916)と初版第1巻との最大の相違は初期資本主義観が180度転換したことである。すなわちここで「妨害」要因として簡単に述べられた論点が、今度は逆に促進要因として評価されるに至っている。ここで詳しく論じることはいできないが、第2版第1巻第2部「近代資本主義の歴史的基礎」において、資本主義の概念規定とともに「国家」なる節が挿入され、「市民的富の成立」の後に、君侯の奢侈・軍隊の需要・大都市の大量需要・植民地の需要と国家的労働者政策が大経営成立の促進要因として決定的に重視されている。つまり、手工業と資本主義の概念的峻別、資本主義的精神論、地代蓄積説の根本を基本的に堅持しつつ、初期資本主義の発展に対する国家の政策的意義をまったく逆に把握するようになったのである。第2版が膨大なものに膨れ上がった最大の理由はここにあるように思われる。そして本稿の冒頭で指摘した「一連の基本思想も変わっていない」というゾンバルトの序言の言葉が正確でないことの実質的理由もここにある。そしてこの論点に関する限り、こうした転換が明確に示されたのが、「近代資本主義の発展史の研究」という副題の第1巻として刊行された *Krieg und Kapitalismus*, München 1913. (金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社 1996年)、第2巻として刊行された *Luxus und Kapitalismus*, München 1913. (金森誠也訳『恋愛とぜいたくと資本主義』[第2版の訳] 至誠堂 1969年) である。
- (3) ゾンバルトは、その具体的様相について食料品・衣料・建設・用具製造の各手工業を概観した後、1848年革命に触れ、少数の分野を除いて、工場労働者の「職人的性格」と家内工業労働者の「ツンプト的性格」を強調している。しかし他方で伝統的手工業者の中から、「小工場主」が「真の企業家タイプ」として「蠢いている」ことを指摘している。(S.482-3.) 彼にとって「小工場主」は、後述するように、問屋制商業資本や銀行資本から出発した資本主義的精神が伝統的手工業に侵入したときに成立する過渡的存在として理解されていたように思われる。

なお、*Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten*

Jahrhundert, S. 48.において、当該期のドイツは「農業国家」ではなく、「ナールンク国家」という表現で特徴づけられている。

- (4) 第7部の途中で、「私がこの文章を書いている1897年夏」という記述があるので(S. 628.), 執筆時点とは1897年である。
- (5) 後述するように、理論編である第2巻の最後第4部も現代の手工業論であり、第2巻の途中で、「手工業的生産・商業様式の後退…をその必然性において証明することがもちろん全体の叙述の目的である」と明記している。(2.Bd., S. 235.)
- (6) ゾンバルトは、手工業の保護主義者が手労働と手工業を混同しており、「労働過程が手労働かそれとも機械労働に基づくのかは、資本主義的組織にとって取るに足らないことである」(S. 599.), という重要な指摘を行っている。彼によればこの混同が手工業保護論の最大のポイントである。この論点はヴェーバーに完全に継承されている。
- (7) 「鍛冶とならんで車大工は、現在の組織のまま維持されている限り、農業経営に局地的に組み込まれることによって、修繕業としては少なくとも農村ではほぼ旧い状態のまま当分の間は安泰であるように思われる。だが当分の間である！発展がこれらの手工業の没落をもたらすことは、イギリスとアメリカの例が証明しているように見える。」(S. 584.)

こうした展望は後述第2巻の「農業における資本主義の発展」ともいうべき視角からの叙述と対応している。しかしながら前出『19世紀のドイツ国民経済』では、農業における資本主義の浸透や共同体の解体と同時に、農村の生活の独自性・資本主義的貨幣経済の例外性・自給経済の強さ・農民経営の計算性や数量化に馴染まない人間的性格、といった論点が強調され、工業における大経営の優位が農業では妥当しないことが指摘されている。その意味では農業に関する限り、資本主義の前進に対する彼の確信は翌年修正されたことになる。(A.a.O., S. 375ff.)

- (8) ゾンバルトはこうした法的考量のもう一つの理由として、「合理的利潤」を獲得するための「契約締結」をあげている。そして「資本主義的精神の興隆によって作り出されたこうした独自の布置状況

の中に、近代『個人主義』の発展にとっての出発点を指摘している。(2. Bd., S. 31.)

- (9) ゾンバルトは以上の論述に加えて、次のように述べている。

「…テクノロジーは生産過程を実行的器官である人間から切り離されたものと見なし、人間をその要素に解体して…個々の過程の目的に適った因果的結果の考慮のみを決定的なものにした。かくて労働分割的方法が方法的にはじめて適用可能になる。」(2. Bd., S. 66.)

この指摘は、テクノロジーのもつ非人格的側面に言及しながら、彼が資本主義の発展という観点からこれを肯定的・楽観的にとらえていたことを示している。こうした立場は、本書刊行の一年前に行われた講演「技術と経済」(Technik und Wirtschaft, *Jahrbuch der Gehe-Stiftung zur Dresden*, 7 Bd. 2 Heft, 1901. 阿閉吉男訳『技術論』科学主義工業社 1941年, 65-94ページ)において、明確に現れている。すなわち彼は、資本主義的経済システムと技術的発展の相互依存関係を指摘しつつ、経済の発展が人間の相互依存関係の複雑化と拘束の拡大によって個人の「不自由」を増加させるのに対して、技術的発展は近代的個人のこうした葛藤を部分的に解決しうる(「技術の発展原理は自由であり、経済の発展原理は不自由であり、拘束である」)ことを強調している。(前掲邦訳, 74-5ページ)後のナチス期になると、ゾンバルトはこうした楽観主義を修正し、技術の非人間的影響をコントロールしようとする「技術の馴致」論を展開する。(Vgl., *Deutscher Sozialismus*, Berlin 1934. 難波田春夫訳『独逸社会主義』三省堂 1941年, 第16章, Die Zähmung der Technik, 1935. 阿閉吉男訳「技術の馴致」前掲『技術論』参照)

なお前期ゾンバルトの楽観主義は、当時のドイツの「技術主義的ユートピア」と連動しているように思われる。小野清美『テクノクラートの世界とナチズム』ミネルヴァ書房 1996年を参照。

- (10) ゾンバルトのこの部分の論述は、迂回生産を巡るベームとレクシスの論争、マルクス『資本論』第2巻の資本回転論に依拠している。
- (11) ゾンバルトは、「資本主義的経済の端緒は農業にある」とのクナ

ップの命題を批判して、「工業資本主義の形成がいつも先である」と主張している。(2.Bd., S.87.)

- (12) ゾンバルトの判断では、イギリス農業においていち早く営利原理が浸透したのは、毛織物工業の発展の結果ではなく、ロンドンを消費中心地とする国内市場の形成と農産物価格の上昇の結果であった。(2.Bd., S.154.)
- (13) この点に関わってゾンバルトは、マルクスの本源的蓄積論を批判し、ロシア・ナロードニキ(シュトルーヴェ)のマルクス批判に賛同している。(2.Bd., S.142.) なおゾンバルトのいうドイツの農村の根強い「抵抗」の原因は、農業共同体の残存に求められるであろう。それは西南ドイツでは、1920年代になっても存続している。
(三ツ石郁男「世界恐慌期における西南ドイツ・ヴェルテンベルク地域経済の構造特質—農工結合の形態と意義」『土地制度史学』第130号 1991年を参照)
- (14) ゾンバルトによれば、工業資本主義の急速な発展にもかかわらず、1840年代までイギリスで見られた農村過剰人口の最大の原因は、初期資本主義時代から続いた救貧システムである。(2.Bd., S.170.)
- (15) ゾンバルトによれば、農村と比較して都市(工業)の賃金が高い理由は、農業の場合地代がコストに含まれ利潤が低くなること、工業では生産性が高く高賃金は高能率によって相殺されること、都市では婦人・児童の追加所得の可能性があることである。(2.Bd., S.235f.)

周知のように農業労働者の流出の原因として「人格的自由」の持つ意義を強調したのはヴェーバーであるが、ゾンバルトのヴェーバー—農業労働調査への言及は、グーツ経営の分析に関わって脚注に文献としてのみ紹介されている(2.Bd., S.120.) だけである。

なお彼の伝統的農村社会の解体と都市の大衆社会成立という把握の背後に、テンニースの影響を容易に看取することができる。事実第5章の脚注に『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(1887)が文献としてあげられている。(2.Bd., S.142.) そもそも二人は密接な交遊関係にあり、ゾンバルトにSPD入党を誘ったのはテンニースである。(Lenger, a.a.O., S.94.)

- (16) ここでゾンバルトは、18世紀の経済学の焦点が「奢侈 [Luxus] 問題」にあったことを指摘しつつ、「奢侈」という言葉には、それが経済にとって「有害」かどうか、どの程度が「許されるのか」という、「倫理的経済学」の観点が付着しているから回避すべきであり、その代わりに上記の「洗練された需要」という概念を使用すると述べている。(2.Bd., S.291-2.) したがって彼が「奢侈」という言葉を使う場合には、必ず括弧が付いている。こうした表現法は、この時点における彼の「倫理的経済学」批判がいかに強烈だったかを示唆するものであろう。また彼は、「奢侈」は暖かさや寒さのように絶対的に規定できない概念だと述べ、後の価値判断論争(1909年)での発言を先取りして、それを規定することは、「ブルーネットの女性とブロンドの女性はどちらが可愛いか」と同一の問題であると強調している。(Ebenda.) したがって注(2)で指摘した初期資本主義の発展における「奢侈」の強調への転換の背後には、彼の価値判断論の継続性と共に、「倫理的経済学」に対する評価の微妙な変化が見られるように思われる。
- (17) 19世紀末の文芸・芸術上の「モデルネ」については、上山安敏『神話と科学』岩波書店 1984年、81ページ以下を参照。レンガーは、1892年に家内工業研究を開始したゾンバルトが、文芸モデルネの旗手の一人G・ハウプトマンの同年に初めて上演された戯曲『織工』に感激し、H・ブラウンが両者をとりもとうとしたことを伝えている。彼らの交遊関係は、ゾンバルトが1900年にベルリン郊外のミッテルシュライバーハウに転居してから、ゾンバルトの友人であった弟のカール・ハウプトマンを通じて始まった。(Lenger, a.a.O., S.51,171.)
- (18) ゾンバルトは「需要の統一化」が促進される理由として5つあげている。1 大企業が特定の規格化された製品を必要とするようになること (ex.輸送用のダンボール)、2 プロレタリアートが低品質の大量生産品の買い手として登場すること、3 公共団体の需要増大によって消費の官僚制化 [Bureukratisierung] が起こること (ex.学校の教材の国有化)、4 公共団体の官吏の増大によって公的需要の増大が生じること (ex.制服)、5 家経済の解体が消費の

集合化 [Kollektivisierung] をもたらすこと (ex. 外食の機会の増加)。 (2. Bd., S. 320ff.)

- (19) ゾンバルトは前述したベームの迂回生産論以外にはオーストリア学派への言及はしていない。しかし前稿の8ページで指摘したように、彼のマルクス論の中でオーストリア学派に対する関心はすでに表明されている。なおレンガーも、この論文においてオーストリア学派に対する「高い評価」が見られることを強調しつつ、ベームがゾンバルトのマルクス論を拒否しながら、それを「中身のある立派な論文」として褒めていたことを指摘している。(Lenger, *a.a.O.*, S. 80-1.)
- (20) ここで展開された「流行」論の参考文献の一つに、ジンメル「流行の心理学」(1895)が挙げられている。(2. Bd., S. 330.)
- (21) シュモラーの『19世紀ドイツ小営業史』とゾンバルトの社会政策的立場については、前掲拙書、第2章、終章366-7ページを参照。
したがってゾンバルトから見れば、シュモラーの小営業保護論は「経済的理性の貫徹」を緩和しようとする道義的・センチメンタルな (= 「倫理的」) 政策論である、ということになる。従来この対立は、シュモラーが「前近代的」手工業の保護、ゾンバルトが「近代的」資本主義の促進というレベルで解釈されてきたが、上記の論述は、シュモラーが「大経営の発展」に賛成しつつ、「前近代的」手工業をそのまま維持しようとしたのではなく、「商人的資質を持つ手工業者」の上昇を政策的に主張したことをゾンバルトが意識し、資本主義の最新の局面が示す「淘汰のメカニズム」を論証することによって反論したことを示している。
- (22) Lenger, *a.a.O.*, S. 136. ゾンバルトの資本主義文化批判が強くなるのは、前述のように農業観が変化した『19世紀のドイツ国民経済』からである。
- (23) シュンペーターは、初版『近代資本主義』について次ぎのようにコメントしている。「歴史的資料に基づく新しい理論の発展を忘れてはならない。その最もよく知られた一例は、W・ゾンバルトの『近代資本主義の理論』である。こうした方向がたちまちブームを招いて、やがて多大の文献を重ねるに至るであろうという徴候は、

すこぶる顕著なものがある。けれどもそれらの文献は、ただちに、我々のいわゆる『精密理論』と同列に置くわけにはいかない。…それは決して『静学的』ではなくて、もっぱらその点に、我々の本質的に静学的な理論との決定的な相異があるのである。するとおそらく、それにふさわしいのは『動学』の領域であろう！」(大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』(上)岩波文庫 1983年, 66-7ページ)

シュンペーターの資本主義理解はマルクスよりもはるかにゾンバルトに負っているように思われるが、この点については別に論じたい。

- (24) 1928年にゾンバルト自ら、1890年代に「確信的なマルクス主義者」であったと言明しているし (Lenger, *a.a.O.*, S.80.), 初版の書評でナウマンも、「ドイツ国民経済学の教師の中におけるマルクス主義者の最も新しい大きな仕事」と述べている。(Brocke, *a.a.O.*, S.110.) この言葉は当時、労働運動に同情的で、SPD右派の政治的立場に近く、かつマルクスの問題提起を積極的に受け止めようとする「市民的」学者に対してルーズに使用されたように思われる。
- (25) このような方法論的立場はジンメルによって刺激されたと考えられるが、この点についても別の機会に言及したい。
- (26) レンガーによれば、『近代資本主義』初版は発売2年後に売り切れ、ベルリンに移った後講演料が印税とならんでゾンバルトの重要な収入源になった。「学者の講演に行くことは、[第1次]大戦前の富裕な市民層にとって明らかに、夜の文化プログラムのポピュラーな要素になっていた。」(Lenger, *a.a.O.*, S.180.)

Abstract

Der Ursprung der Diskussion über
den modernen Kapitalismus (2)
—Zur Bedeutung von Werner Sombarts
“Der moderne Kapitalismus” (1.Aufl.1902.)—

Shin-ichi TAMURA

Anschliessend an die Genesis des Kapitalismus, gibt Sombart eine kleine Skizze der wirtschaftlichen Situation gegen Ende des Frühkapitalismus. Im Frühkapitalismus sieht er nicht eine dynamische Wirtschaftsentwicklung, sondern “eine Lähmung der kapitalistischen Energie”, bedingt durch die Ausnutzung des akkumulierten Vermögens zu unproduktiven Zwecken (Kriege unter dem merkantilistischen System) und die sich daraus ergebende Unterdrückung der Bevölkerung. Diese Auffassung des Frühkapitalismus war eine der eigentümlichsten Bestandteile dieses Buches. Sombart selbst änderte später seine Ansicht darüber gründlich.

Nun war die Aufgabe des zweiten Bandes des “Modernen Kapitalismus”, Sombart zufolge, der “Nachweis gesetzmäßiger Umbildung einer frühkapitalistischen in eine hochkapitalistische Volkswirtschaft”. Im Gegensatz zur “empirisch-zufälligen” Betrachtungsweise des ersten Bandes versuchte er hier unter dem Gesichtspunkt der “Gesetzmäßigkeit” “eine Theorie der kapitalistischen Entwicklung” aufzustellen. Es ging ihm darum, welche Entwicklungstendenz auftreten kann unter der Voraussetzung, daß der kapitalistische Geist als treibende Kraft, die Gewerbefreiheit und die moderne Technologie bereits gegeben seien. Erstens stellte er fest, daß das Eindringen des

Kapitalismus in die Landwirtschaft, eine Folge der Entwicklung des Industriekapitalismus und der Preissteigerung der Agrarprodukte, die Eigenproduktion und die alte Agrarverfassung aufgelöst sowie auch die Überbevölkerung auf dem Land hervor gebracht habe. Zweitens vertrat er die Ansicht, daß die Bildung der modernen Industrie- und Handelsstädte eine entscheidende Rolle gespielt habe, dabei diese Überbevölkerung zu absorbieren. Sombarts Stadttheorie stand im Mittelpunkt des zweiten Buches. Denn, je mehr die Stadt eine Bedeutung als ökonomisches Wachstum- und Konsumzentrum in der Volkswirtschaft gewann, desto stärker konnte sie den Charakter der gesamten kapitalistischen Kultur bestimmen. Für Sombart bedeutete die Bildung der modernen Grossstadt die Entstehung der Massengesellschaft, charakterisiert durch Individualismus, Rationalismus, materieller Kultur und Ausdehnung des "Luxus".

Zum Schluß behauptet er, daß sich der Handwerker dieser Entwicklungstendenz nicht nur anpassen, sondern untergehen müsse, soweit es ihm nicht gelingt, aus eigener Kraft zum "kleinkapitalistischen Unternehmer" aufzusteigen. Das war eine Kritik an der Handwerkerschutzpolitik im Schmollerschen Sinn. Nach Sombarts Meinung basiert der Kapitalismus überhaupt auf dem "Auslesemechanismus".

Hinsichtlich der Frage, die sich Sombart am Anfang dieses Buches stellte, nämlich die nach einem Ausgleich des Gegensatzes von "Empirie und Theorie", läßt sich Folgendes zusammenfassen: statt des Gegensatzes von "Empirie und Theorie" kam bei ihm selbst eine Dichotomie von Geschichte und Theorie zum Ausdruck. So blieb er methodologischen Schwächen verhaftet, die Weber und Schumpeter in verschiedener Richtung jeder für sich überwinden mußten.

北星学園大学経済学部 北星論集第34号 正誤表

頁・行目	誤	正
19頁14行目	Heimatengeさ	Heimatenge_
31頁5行目	中央資本__	中央資本市場
31頁下から 14行目	<u>Die Kosten von Hitlers Krieg</u> <u>—Kriegsfi</u>	<i>Die Kosten von Hitlers Krieg</i> <i>—Kriegsfi</i>
239頁下から 1行目	職業予備教育 <u>の</u>	職業予備教育 <u>を</u>